

0 150 cm 10 20 30

SEKISUI JUSHI

聞書 和歌事 古今詩歌

543
*
10

10



三月九日堀田上郎左衛門亭

行孝

いふたてをうけしきく信のまゝ余の中の花の二番

胤海

うらふふいふのうらふふのうらふふいふいふいふいふいふ

信治

夏らうしをのまゝ余のうらふふは花のうらふふ花の二番

一釋

山極はのなほはうらふふいふいふいふいふいふいふいふ

以范

うらふふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

宗好

花の春はうらふふいふいふいふいふいふいふいふいふ

卯月四日中山備前守亭

寄月云常

久恒 中川渡守

はらや新にあらわのひやふたれうらふふいふいふ

寄雲云常

以范

世間をうらふふいふいふいふいふいふいふいふいふ

寄風云常

隨世 島山牛庵

わうのや草をうらふふいふいふいふいふいふいふいふ

寄雨云常

義概 内友左衛門

はらの花やお余のうらふふいふいふいふいふいふいふ

寄露云常

胤海 旦那僧正

うらふふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

寄雪云常

信治 中山備前守

はらうらふふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

芳在子乃

宗好

かはらねにのこわくあつてよのふしにあらはるる

寄号主乃

幼春

まへはる百所のまじしめくね様の長ふそん

卯月廿五日愚亭

夏懷高

胤海

すまゝふら思ふはまゝ夏のものいゝもの人のまゝに

久恒

極立し人まゝをわらふといふは花のつゝをわらふまゝ

義概

夏ものいゝもの身のものいゝ花ものなほいゝあつ

信治

けしきあつてふの軒の青多にたつたのさういふ

随世

ちやうと又あつてはふ都るまじいものいゝもの

宗好

昔いけふよりあつたの昔いけふよりあつたもの

収花

あつたのちやうとあつたものあつたものあつたもの

行春

あつたものいゝものあつたものあつたものあつたもの

五月三日中川佐渡守亭

披書達昔

胤海

いゝものあつたものいゝものいゝものいゝものいゝもの

ふれんも 縁なほいふも ころほのふいふいふ

宗好

一第は思ひなりははのいのまゝいふも 返らぬもの

胤海

えれまのいふも ちやうど 外に 佛のほは ちやうど

随世

しるし 666 of the 1st (2) ちやうど ちやうど のいふ

投す逢音

宗祇筑外

日

ちやうど のいふ いふ いふ のいふ いふ いふ のいふ 雅然

持するもの いふ いふ いふ いふ いふ いふ のいふ 依

今ねに ちやうど いふ いふ いふ いふ いふ いふ のいふ

ねねねのりわ ねね ねね のりわ ねね ねね いふ いふ

いふ いふ いふ のいふ いふ いふ いふ のいふ いふ

いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ

いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ

いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ

いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ

いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ

いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ

蘇府様の日いふ

日

いへに述懐する事と云ふ又神にてもあるトモに又い
かり申すにうかりにふくまふをいふに今云ふに
九述懐はむねに——いふ言者も内述懐はるトあり
應なるトありタタラシク然にいふに述懐はるトある
之を真に云ふへしと云ふ

内府の述懐はるトあり 内府の述懐はるトあり
ふくまふにふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに
ふくまふにふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに
ふくまふにふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに

タハしてトありトありトありトありトありトありトあり
定家卿誕生應保二年壬午 應保二年壬午 寛永十七年
（四百七十八年） 右五方ノテリ述懐はるトあり正治年

八月

以時定家卿誕生

八月

保保山ノ中有一主田 保保山ノ中有一主田 保保山ノ中有一主田

日

鐘愛柳堂平政号 鐘愛柳堂平政号 鐘愛柳堂平政号

大鏡書すに清友太后サレ時定家卿誕生 大鏡書すに清友太后サレ時定家卿誕生

数に今政卿表称常夏美庭 数に今政卿表称常夏美庭

夕

夕に今政卿表称常夏美庭 夕に今政卿表称常夏美庭

義田の件は返の礼謝しむに 義田の件は返の礼謝しむに

何とせむにふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに

わりのうへにふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに

日 義田の件は返の礼謝しむに 日 義田の件は返の礼謝しむに

ふくまふにふくまふにふくまふにふくまふにふくまふに

ちしめたりまふかきうもあらはしむたりの
 路にちかき衣裳よもりのやまねも容
 餘をうもれむわらわら
 かきうちの雨の鈴のしるもまもるに
 なほ見せぬまのうきは春のえにうもれ
 のやいぬもくものうもあつたうの
 ろくもくもくもくもくもくもくもく
 くにけきくもくもくもくもくもくもく
 れきれきくもくもくもくもくもくもく
 へきくもくもくもくもくもくもくもく
 らくもくもくもくもくもくもくもく
 あはははははははははははははははは

[illegible]

[illegible]

ふのねをきりし樹を立ちあがりたまたまのこころ

從二位少輔

[illegible]

前才幼く定あへず

[illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

心珠詠藻

四つう事二人の智し善を備し并りて
 親いそとの理親とてこれにまはるるをたしめり
 之れより下よりあつてもいふゆゑすこひにあらぬ
 寺のふはたはる寺とぬふすむてふ一國より
 親言の本像の前は花車花車の新をとり
 神をそとをあらわすつゝめつゝはゆり
 三つはの面影下はまゝく致意つゝ
 師寺の別はまゝなることわづかし
 ぬれりし只行しそはわいの道はまゝ
 まゝは教聖の之考の如と尋ひまゝ
 まゝなるゆゑまゝとてはるはる
 のまゝに持て是れ中守師盛のまゝ

智恵位の才に世習記法習うといふ人にて
 世に教習のみを得りてつゝつゝつゝつゝ
 ちやいと旅し上の方に衣冠とちよつとちよ
 り友だちもいふつゝつゝつゝ柳正成の傍に甲の
 中へ衣冠と柳とちよつとちよつとちよ人の
 うつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 柳正成の傍に甲の
 中へ衣冠と柳とちよつとちよつとちよ人の
 うつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 柳正成の傍に甲の
 中へ衣冠と柳とちよつとちよつとちよ人の
 うつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

大坂より茶園をゆき中比梅尾何上へと
 十之七の山をゆきつゝ大坂十七年
 九月半の申すゆきゆくやまきき大坂
 へゆきとまききききききききききき
 年にとにたるきききききききききき
 日 新嘗令とゆきききききききききき
 つかゆききききききききききききき
 うききききききききききききききき
 二年四月よりきききききききききき
 日 仙六十九より二十百よりききききき
 け佛のゆきききききききききききき

ゆきききき

八景之江 覺龍禪所 貞和寺
 洞庄秋月 山市晴嵐 江天雲雪 満洲秋雨
 漁村落照 遠浦漁帆 烟寺曉鐘 平沙落雁
 玉洞 洞庄集
 江天 雲雪 山市 漁村 洞庄 平沙 落雁
 洞庄 雲雪 山市 漁村 洞庄 平沙 落雁
 山市 洞庄 雲雪 漁村 洞庄 平沙 落雁
 大坂江敷
 洞庄 雲雪 山市 漁村 洞庄 平沙 落雁

不審

いさなりちよに 佐助物成ちひ草わり一書
なりちよにいさ極のちよにそや

定家へ天福年中自筆のふしなりちまふ

とゆゑ書誤人多ふは只自量のんいふなり
ちまにとんち道ノ集すものなりちまに
とんち集のんなりちまにちまに

清濁又四つに分ちて読む

長江の舟子

[illegible]

機微録より所引の二行五字あり

小島乃乙清濁也

桐栞シヨリワカトクを以て字淵とせん

一野寺の僧
修侶業蹄は鼓の心只人

凡書にありて心ありて書ば

事はいつて五王子派の心は里芋程の硬
一まんは但願寺臨傳下と云ふおかし
路の寺にゆるといふはあつて

予のきぬしゝゝゝつゝ
臨ん

一兩居友
洲友可為人將欲
又學本不爲

是又常事也

一、點和板

山溪極少

馬世

和世ノ後ト云々信ノ援了ル事ノ其由

亡月、援、月、儿、

一平の懐紙名を附之上るわ
ひくく又紙をとり

張之江 晴如 伍 仲 高 日

三すんはむわうふ乃井と名極まる草そ

水草花子

一 萩の山 皇女の墓と云ふ

皇朝の
名所

東集のわりの字法何三の寸

逢ふを
すりあはれ
なかり
なり

大庭氏の如き孝山とわづけ候三郎といふの癖業

抄りあるも

認事信用し

まゝなりやそこへひきつゝねへいゝものなほのいふて
石ののちのちのち

石清水院付ノ条ト三月ニテ約ハ席人ニテ我友上人

十人内裏ニテ多クのかはりのたとも賜て冠さる

襦袢うめちうく定の度ずとめきめこの

海軍に於ける軍令と
推察

様々なるものありはけり

右入子の内まゝ五箇

更不知

わづのたそしものもとに、なつてはじろのつれに、
ちひろのかりゆき、
ひろのくさくさも月なん

たしよりかりは名_な解_{とく}ん月

いづのふも同心

金葉

懐する程なれりつゝ思ふにうらもて後の声も
ちとるりや

とあるとき月初しなるに
年月さあつてもわけてうらもての中はつゝとあるに
ちとるの中れかゝるのちとるやうに
初月とあるに鐵鏡にカノ像に柳の影に
いふにうらもて

ちとるやうに
ちとるやうに
ちとるやうに
ちとるやうに

ちとるやうに
ちとるやうに
ちとるやうに
ちとるやうに

ちとるやうに
ちとるやうに
ちとるやうに
ちとるやうに

ちとるやうに
ちとるやうに
ちとるやうに
ちとるやうに

ちとるやうに
ちとるやうに
ちとるやうに
ちとるやうに

ちとるやうに
ちとるやうに
ちとるやうに
ちとるやうに

いざ古き有ゆはと縁り尋んと後人い又縁り尋んて
引アレト云人々振下るるゆゆん

一平懐紙やちやう あまのあまも又二条冷泉お

さるらん石明かりや家ノ人ミミ尋ず浅ゆん

道を位後 意定ハ十二事五答い

天文四年い 未仲秋下旬

不審

ものぬのいふものなり ものぬのいふもなり

物部乃射トワケえん 石は石動見なり

あまのすゝけのけりききなり

あ陀古用く 今葉すをあ用いすこいさうしあう

いふなりたけのふといふやう

五

見きりくたに野鴨の雲 大なり

御食都四日之つ調等 澄路乃野宮之海之

新食都四日之つ調等 澄路乃野宮之海之

数箇の喜月山の平向りなり 一さゆり張の月

さゆり月のさゆりなり ツンケえん

神祇十首内

あまのさゆり張の月さゆり張の月さゆり張の月

さゆり張の月

面影にむきもさゆり 一さゆり張の月さゆり張の月

面影にむきもさゆり

さゆり張の月さゆり張の月さゆり張の月

大神祇ノ心なり 七類

少可なり 右夏外同なり

續古今 賀茂修所外十一月
慈鎮大僧正 右作者書振る有別子細叙

慈田大僧正 謚号慈鎮和尚 謚号トハタリ名トテ
没後ニ其迹ヲタトヒテ更ニ名ヲフル事也

春日同詠 至極ウヤウヤ

春日詠 是ハスミウヤミヲ云後ナ

右懷安詠作ナク極クナクナクナク

高妙尾上鐘 楊州ニ又別ナリトテソナリナク
又ソナリ名トナリナク

右記号ナク

康暦二年十一月准三宮 誰ニナリナク

良基公 後著之因

不審

一詠海辺雪和歌 右二首三首懷安所ナク
詠作ナク 冷泉家流ナク 不可書ナク

一平新詠 付々々々々 右五首詠人ナク
たうのりも新詠ナク トモハストロストナク

心算ナク ナストロノ意ニテアルナク

ナクナクナク

山路秋なり 山路秋暹 右五首詠人ナク
山路秋ナク

山路秋ナク 山路秋暹 右五首詠人ナク
山路秋ナク

何事ぞ知りぬは十のわりのやうな事なれど
河又麻呂也

一山崎 昭徳寺 寺泊

右寺より代集訓書より依りて言ふ所の
付人又平なりとも代下候也

すまひつゝも詠ん山崎ノ寺にてもいふ
くもより言ひしすゝる付人ハサモこそゆめ

一言あ録え 右取之月日取後ハ人 大永六年八月日取え

一清くつがねのくまふりさうつはの園とに月を明り

石鐘のくまふりさうつはの園とに月を明り

おとこや付太上下ノ氣可下用んぬ

一河川院百首年記取後ハ

康和二年月日但此ニ未ゆ

藤季能 修理太史記季能

三三宮 後三三宮院季能輔仁親王

如名 未詳

工下よりこれの事ありていふなり

源師之入道法名生蓮也

通入道法名 達経親輔ハ男ト云候多ク有

達経法師 平家ニ付之御りへり由ゆ

今津宮換校三郎入道也俗名頼經云人字上

從三位藤原朝長経家

從三位藤原朝長経家 それの事ありていふなり

石京太史記輔孫

彭亨名所

中納言親注 号二前中納言

主二夏後配 日即一流

長盛 名基子高过之社

名基子 名基子

名基子 名基子

名基子 名基子

名基子 名基子

名基子 名基子

一連日

一連日

一連日

一連日

花より

右和歌

三月

大

礼

連

刻

刻

しかば中よりあふりて又まねてつづく
又ゆゑ私の唐うた無名の歌印せし短人三
おろつゆり今までけいこまのちの事や
あふすつてふりまてゆひてもけいこすく
折々の謡はちかづても何日か無き
本修らぬまゝにまづてもきすいふ
いふもいふやうはまづいふね極よ
あつて

一應多しと他は後の事

是もよき歌のききかたは應和の上りき
いひて位者ききとくせぬいひて
案ききは位者ききはなる事いふなれ

大永五年のいひ位者ききはなる事いふなれ
夜京極中御定あつて位者のうた極み
秋秋侍宴同詠に月久明

應和歌

冬謡に在民部いふ侍与守信

藤原朝臣定家上

是の位者ききはなる事いふなれ
いひとくせぬいひて
二月三日の月ハ二りききとく又二月の月
ふりもききとくいひて
のうへに

詠隔夜部と和歌

七

七

將不定志

七

七

三育の懐中書只三育の由ありき書しとて此書を
す我よりいさ人のき席の付のういふにたりて
月の字をばちのせうもいふは中いふ字を
いふに誦けそと針ち

[illegible]

押板のくつゝの例の一對を紙で巻いて
一斗の病を

四角岸樹凡陽信紙をたへ病の心乱思烟輪
流鴻花枕を枕を懐きあつていつては代
さのこゝろをいふ外平の病を病をいふ
そつと煙くわう人の同乳をたてあつては
あつてはねうとに乃牛の一毛をともなう
おぼし

石柳原三任資定マほろ

河海十上丁面

辰子

許師ニ系家懐帝ヲ文を分取リ口リス先上ニ

了ん短冊計取テ文を分キハは横板と云テリテ懐
帝ヲ取テ右ノ懐ノ懐。重リトテ取テ上下ニ
上ノ中ヲ極メヨリノシテ文を分キハは横板アリ
アケテ海頭アハハ懐令リ中程ノ上ヲ極シ
リノニニテリテスノ如ク重リ短冊ヲ又重リ取
充按海ノ懐ハハハ海頭アハハ短冊ヲ又重リ
テ極シテリテハハ懐リテス

冷泉家ニ懐とウラヨリトハハ懐リ内ニ重スル短冊
ヲ又重ノキワニ懐ニ重リ又懐帝ヲ懐リテス
内ヨリ取テ又懐セテト重短冊ヲも許師ノハハハ

不審

下より上よりたてをたて骨をたてあつては

[illegible]

のぞきにまゝつてあそぶよりうら

[illegible]

目、ハカリニテモナシ唐ニモトア、ん、唐ニ刺ス。

神中有漫刺十詩三卷
入祜衡少政多下

[illegible]

いすはかりニスツクし
かん道ニ行くとまりたるヲヒトマツル

一矢書て片々 傍留る

一、^オ^ホのまうマウのようけきふ分果

ちうまのきりしのもろけちうまきりしに座し

夜ニシテ道ヲトヒテワタル

一、
二、
三、

きつとてふれりの字と聞きしなり

心ヲスルヲテアヒサト云

一、この家の^中の事^は大に^も

下子入王字，豆三時，修多，乃入足，乃字之。

所ノナトノタラニウレキ 押しのきつて

後より八月にタラエに参り物に

市
三
七
二
市相
後

卷縮之夕テヨモ石同ニ歳久名蹟ニ

絶字ヲ書入る乃テ水ナニ用紙ノカハ

まけりや いふふや

記成いねやむし賀の死はあ日ノヤリ書きた
いひ書きたはけし居凡ニ一りいふふやうくきけ
言ふやうしん

一松道集 松多抄いふ書 けりいふやう部
今のもやうきふふやう部は代身書きたは
松多抄いふ書とわり

松多六百今ふ大書新ト書きたは松多書
たふしりしとふふは松の中り松多書
付ふふふふ松はふふふと松多書
松多のふふふ松多書 松多書
ふふ

あつる はの字清濁や

一松の松多のり

ちやう極いふふや

松多の山いふ本の松多書きたは
トきいふふ(つら)いふふふふふふふ
一松いふふふふふ

ちやう極いふふ

一松多はてふふふふふ

一松多のり 松多いふふふふふ

松多いふふふふふふふふふふふふ

松多いふふふふふふふふふふふふ

松多いふふふふふふふふふふふふ

松多いふふふふふふふふふふふふ

何と云へども優は長きく時の 心泳振舞ふと
 まわぬ座きくこの白妙の梅の雪のうら しの凡
 此森弦の凡の字もあやふしうあつたれ平
 りてはなすい一字まできこぬりしうら
 國殿も斜にちよ一字塵を照もふかきとや
 りとこのよのせいにいふさうさうき言にやれども
 由あやしなむおのすめを唐下てのうられ舞の
 あきの内もうごしてのうられ舞を 和風を人
 のつねにえりてを舞をうらむ
 るるにうらふりとのうら雷のうらふのなまやせ
 世は床に別のはなを舞むむむむむむむ
 うらあやふしこのうら舞をうらむ

[illegible]

柳原初雪咏

うゑり けいふて むきふく せうか

ちいさういふ所へもきこえぬやうな声がい
きこえぬやうな声のうしろをきこえぬやうな

いふ所へ

ほらちいさういふ所へもきこえぬやうな声がい
きこえぬやうな声のうしろをきこえぬやうな

ちいさういふ所へもきこえぬやうな声がい
きこえぬやうな声のうしろをきこえぬやうな

ちいさういふ所へもきこえぬやうな声がい
きこえぬやうな声のうしろをきこえぬやうな

ちいさういふ所へもきこえぬやうな声がい
きこえぬやうな声のうしろをきこえぬやうな

ちいさういふ所へもきこえぬやうな声がい
きこえぬやうな声のうしろをきこえぬやうな

ちいさういふ所へもきこえぬやうな声がい
きこえぬやうな声のうしろをきこえぬやうな

いふ所へ

ちいさういふ所へもきこえぬやうな声がい
きこえぬやうな声のうしろをきこえぬやうな

ちいさういふ所へもきこえぬやうな声がい
きこえぬやうな声のうしろをきこえぬやうな

ちいさういふ所へもきこえぬやうな声がい
きこえぬやうな声のうしろをきこえぬやうな

ちいさういふ所へもきこえぬやうな声がい
きこえぬやうな声のうしろをきこえぬやうな

致立止

うつらんたふもあはれりしうへへんあまへつらん

あまへ

あまへつらんたふもあはれりしうへへんあまへつらん

あまへ

あまへつらんたふもあはれりしうへへんあまへつらん

あまへ

あまへつらんたふもあはれりしうへへんあまへつらん

あまへ

あまへつらんたふもあはれりしうへへんあまへつらん

あまへ

あまへつらんたふもあはれりしうへへんあまへつらん

野かた

あまへつらんたふもあはれりしうへへんあまへつらん

元和五年八月廿六日 鶴の會

豊前中津下向時感海路名作秋首并短歌沙汰宗施上

あふくよと

やうたふたて

ふさふさ

あふくよと

あふくよと

あふくよと

秋の田の

いふくよと

遠のらぬ

こころの里の

馬のうへ

ゆらぬ後の

あふくよと

あふくよと

いふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

あふくよと

八重敷一丑首和子

此一首

去首一丑首和子

海上脱衣

ふたのうにやいりねなるあひたを風海でやまはるの格立

松蔭雪

ねいともそそきぬきくの雪こそわくのうけは

落花は丸

花はうりもすしつねはきつちなる丸もいづれに

そけふいりたはきつちなるうけはもさるは

遠見眼あけきつちのいづれ

林泉

林泉いりしすしつちのいづれにきつちなるうけは

納涼とて

わつちのうけはきつちなるうけはきつちなるうけは

新衣のうけは

吹方は秋のうけはきつちなるうけはきつちなるうけは

新衣のうけは

新衣のうけはきつちなるうけはきつちなるうけは

うきりあつちきつちなるうけはきつちなるうけは

なつきにきつちなるうけは

なつきにきつちなるうけは

なつきにきつちなるうけはきつちなるうけは

なつきにきつちなるうけはきつちなるうけは

なつきにきつちなるうけは

實草處

とく我にちうしをまのけうなりすゝに板あきん

園路雪

世の戸をきゆきにむねやきくもなる屋のすゝ
 トウ道すゝきくしん

トウ道平ヲサツテモてゝん

五

はーミナ 神々々々 我々うらやまをうらやまやあら
うらやまをうらやまやあらうらやまをうらやまやあら
うらやまをうらやまやあらうらやまをうらやまやあら
うらやまをうらやまやあらうらやまをうらやまやあら

ふとふとふとふと

逢石雪齋

中へうねりつゝくひのちうけをすゝん
けんとすゝくひのちうけをすゝん

シ
凱
在
其
中
一
也
孤
子
之
心
也

此乃以趣向時爲準

躬身忘

とらけおれちもつてういふにこのこすくのこの全
はれに泳のうも月おれおれおれおれおれおれ
いん

75

山家逸事

ううりもくちやふにうれて又せうのふられちる
ううりせきもあま常れきうく死な
せのうきうあてはつはひのなきとさうり
ねね

福伯良

わくはさうかへ 依あうこえいもうとれさうさあ
なうくとある五文字の黙のわくもいふもいふ

なまじとあり五文字の歌なりとも心算

まねハあそび

愚點八首内長一

言旨

連筆書

公國

春の暇

春の暇にまゝあそぶをまの春とまねてまゝあそぶ

春の暇にまゝあそぶをまの春とまねてまゝあそぶ

春の暇にまゝあそぶをまの春とまねてまゝあそぶ

家元

家元はまの春とまねてまゝあそぶ

家元

家元はまの春とまねてまゝあそぶ

家元

家元はまの春とまねてまゝあそぶ

家元

家元はまの春とまねてまゝあそぶ

順徳院

於一乘脇坂尾曲水ノ宴ノ事

同五年中秋ノ初メ大覺寺殿京都ヨリ御下向ソ

ナサレケル然則秋來旅泊ノ蕭疎ヲ慰奉ラシカ

タメ又ハ易遷時難遇友ナルカ故君臣詠詩歌催

興タメニ水石勝地ヲモトメ同八月二十日ニ於一乘脇

坂尾曲水ノ遊宴有之先其御人數ニ大覺寺殿義

俊四辻大納言言秀遠同息中將公遠飛鳥井

中納言雅教同息少將雅敦大膳大夫俊直朝倉

左衛門督義景同九郎左衛門尉景紀本林院

鷹彦後中務大輔景恒ト云也同筵周伊月鎔澄藏主宗澄

知王永能覺阿聖懌經王寺日尚豐樂人將監

親秋半井禪佐同左馬助明宗同治部卿明

名大月三郎左衛門尉景秀曾我兵部入道
宗譽前波九郎兵衛尉吉繼振平右衛門尉吉
重梅野三郎右衛門尉吉仍ト云々詩歌少ク載
紙面之

早凉至

花ナカス昔ヲ汲テ水ノ葉ヲウツフ秋ノヌ・シリ
女郎花

初馬似字

聖澤

新馬成行字々連
秋風萬里夕陽邊
旅翰影映芙蓉錦
恰似回文詩一篇

嶺月

景紀

モロコシノ遠キ影ヲモキニトルヤ嶺ヲウケル月ノ盈

林葉漸黃

月鎔

葉々漸黃秋樹陰
停車留馬不堪吟
曉來露若爲霜去
鴉外夕陽紅滿林

紅葉帶霜

飛鳥井 雅教

露時雨ソノモワカシシウスヲユリ紅葉ニトクル霜ノトヒモ

菊

大覺寺 義俊

流レクル菊ノカサキトリトリニ袖ノカホリモ花ノ下水

菊延齡

和玉

郡賢相集宴江頭
曲水流觴採菊浮
花作莊周大椿去
一枝上置八千秋

寄天憲

公遠

空ヲミテカハツル心ヲヤミト心月ニサメテ見シ

寄衣戀

宗澄

モラサントツム涙ノ唐衣ウキナシ後ヤサテイカ、セシ

水郷路鳥

言仍

鷺ノ井ハ蘆邊スシキ梯陰ヲハツラニ浮ム三嶋江

泊雨滴蓬

宗澄

旅泊誰言田方重

逢窓和雨一吟濃

滴聲喚醉客船夢

何啻寒山半夜鐘

寄鶴祝

松林院 後歸中務大輔 鷹瑳

白鶴聲清聞九天

遐齡正好祝安全

十列三鳴入君手

十歲仙禽在御前

肥後國

芦山野坡浦

万石
石部
十九
万石
石部
十九
万石
石部
十九

右長田王彼遣筑紫激水當可乎之角。

わがをいふらんや平山の野坂の浦みちのさ

里

中書省

素より此の如き心持野郎のまゝに振舞へ

風流

八雲山為國清師所相模而立之

大以類經

まゝなすをわくはるふたをいづより白皮をかきし

漢人不知

あつた心もあつたまへに浪のうれとて

字云小鳴

法性寺入道

いふをくちをねえわいふがわいふあまのこにちをねえわ

松 穀瀧

重久

いふはうらうらあまのこにちをねえわいふあまのこにちをねえわ

松 宗長

いふはうらうらあまのこにちをねえわいふあまのこにちをねえわ

松 多岐礼盛

公明

いふはうらうらあまのこにちをねえわいふあまのこにちをねえわ

松 源人

いふはうらうらあまのこにちをねえわいふあまのこにちをねえわ

八月十五夜會 於宇土

月、め秋友

月前松風

松山

清鏡掛空秋已半
賞吟夜深取孤枕

露葉散碎玉貴疎園
無價松風回夢魂

月下接衣

行孝

海邊秋月

宮政

湖上月明

後安

湖上波閑泛玉輪

扁舟把棹樂茲身

功成名遂亦疣贅 万頃清光不拒人

古寺殘月 無異子

古寺蕭然秋夜長 閑者殘月倚禪牀
鐘鳴漏盡無人到 獨有姮娥自主張

深山曉月 宗朝

嶂岫墨作幾層林 四面沉沉夜更深
庭半有殊西嶺影 一鉤明月照禪心

野月露深 直之

しづかなる夜の露をまきあはるる月をみれば

田家見月 正安

秋の月をみればさうなう物なりけり月を

河月似氷 猶白

冷碧寒光一色秋 騷人嘯詠步沙頭
清波揺月に難碎 恰似堅氷凝不流

い月十ふねあやなれ代 夢

さめなまの月をみればさめなまの月をみれば

ふねあやなれ代

正名

一年一度春はは 後月清光月をま

まは

わかれの月をみればさめなまの月をみれば

嘉

[illegible]

三十首和歌

早春鶯

佛敕

うぐすくすうぐすく我が鶯のこゑは春の
古今集御傳授よりね比詠うん

和歌

花もさゆえんものさへ花に白くも花も
はらの字今うぐすくはるわくせりの
よるうぐすくはるわくせりの
この字うぐすくはるわくせりの
花の字うぐすくはるわくせりの
今のカナトウラノレ

夕梅

あすもるうぐすくはるわくせりの
うぐすくはるわくせりの
深切に愛こまへんは子にこそはるわくせりの
さるうぐすくはるわくせりの

庭より

うぐすくはるわくせりの
うぐすくはるわくせりの

見たり

うぐすくはるわくせりの
うぐすくはるわくせりの
うぐすくはるわくせりの
うぐすくはるわくせりの
うぐすくはるわくせりの

岡部公

くらりてさうは社あり味きゆめにかうきいよめ
日まゝの深草やにけり園のりあかすに
らみしきすにきしうがすにけり現にふゆ音に
きけとらう

九月雨久

すきいふもやうにけり深草にきけり
浦のききとるにけりけりけり

水田屋

あめふにありあめふのまにけりけり
なゆにけりけりけりけりけり
えん堂にけりけりけりけり

いの字よりしをせん改に堂ナラテ
けりけりけりけりけり

あまのい

あめふにけりけりけりけり

西行

樹陰納涼

あめふにけりけりけりけり
あめふにけりけりけりけり
あめふにけりけりけりけり

草花雪

あめふにけりけりけりけり
あめふにけりけりけりけり

をゆくはゆふのあすはうけのきこをゆく
のけいこつわにがふれんうとちきうしとりけ

連日雪

晴やぬるす後には雪の舞はしと雪にがし
タレのうきさひのこきさく人ふふこ
やうきさくこりさくノ洞ツトてメリ難
雪ニナキえは山如し

浦千鳥

うきぬわふ友ちとあなうにひらねわぬ
物も旅りの女ナリ島もあふとふれけり
我友ト思ふなり

夜神楽

みちのちさくはうけやうきわのききしあ
こころのりいお言や あつち

早しうきうきを物ノ名にぬきしうき
おきりうき此早しうき曲り星ノ曲り
うきより更ニ勅使ヲお上ニ下下
うきより更ニうきよりうきよりうき
と休や

女庭

ねきさくはうきわのききしあ
うきより更ニうきよりうきよりうき

不達意

うきより更ニうきよりうきよりうき

人ノナキカタクワシキシ我モ里ノヤチン
ツレナクワ井ニケスミナカラ一タラハ地底國ノ
ノヨクニキチナヒクモヤアラントカリノ
オシタノミハウヤ宿セヤト

待遊

ちやていぬもくちやていぬもくちやていぬもくちや
りちやちやちやちやちやちやちやちやちやちや
同音ニテツキせん句

遇不逢遊

ちやていぬもくちやていぬもくちやていぬもくちや
りちやちやちやちやちやちやちやちやちやちや
思ふのみ
恨遊

ちやていぬもくちやていぬもくちやていぬもくちや
りちやちやちやちやちやちやちやちやちやちや

西列

曉雪

ちやていぬもくちやていぬもくちやていぬもくちや
りちやちやちやちやちやちやちやちやちやちや

おろき

ちやていぬもくちやていぬもくちやていぬもくちや
りちやちやちやちやちやちやちやちやちやちや

霧中燈

ちやていぬもくちやていぬもくちやていぬもくちや
りちやちやちやちやちやちやちやちやちやちや

山家宛

ちやていぬもくちやていぬもくちやていぬもくちや
りちやちやちやちやちやちやちやちやちやちや

疎影横斜 水清淺 暗香浮動 月黃昏
う 詩のあり

庭春雨

雨の軒のまじりて風のまじりて
遠き点滴如琴築なり

鬼花

人のあはれおもしろきもの
わかれはわかれしものなり

回廊

まじりてはまじりて
はまじりてはまじりて
のりなり

五月雨

五月雨のまじりて
無きもの

北窓

まじりてはまじりて
まじりてはまじりて
まじりてはまじりて

まき立

まき立てはまき立て
まき立てはまき立て
まき立てはまき立て

樹陰納涼

まき立てはまき立て
まき立てはまき立て
まき立てはまき立て

無別をわく人難逢也

遇不逢也

うしうしあわさるの地にとつてそのあつたは
ふしもいさうしうともう初めあふまき

恨也

筆ううにせりてはけを逢ていふはうのう
無ふを

曉雪

つうものうのうとてあめのをれを理
高砂此詠えに習山おる又名所
スにサモアナリ

夜爰

よものまにふさふさの雪のうら
謝雪うらふまに池塘生春草ノ句
得ん故事やソレカガリテ霜ノ枯
如せんもサキコトノ葉は此出集
何
冒月モサキト云々此奇題ノ愛
ハ備
えんサキヤウニ彷彿やサレ
此一春早トノ意シ呈セタメニ詠
是又
古例一時

羅中燈

ふさふさうらふさうらふの
雪のうら

山家嵐

世のつとめをばさへもひきかへぬわがのたまはる
うねあゝいゝねのまじり

社頭祝

神をさして日嗣のまじりつとめをばさへぬ
日嗣帝位ヲ云日神ノ譲リハ嗣行四ノ
しゝく此度ノ通神傳授ハ 法皇ヨリ新院
傳ラレウ 帝位ヲ譲ラレタル新院ハ
又此道ヲモエワラルヲ祝ヒ奉ル此道ハ王
法神道ノ傳授也

ちい思証書

少老ノ次少老混
乱平治ノ日野人跡モ資慶中院
大納言ノ院然依テ傳授ニ由ル

早春鶯

中院大納言

東のけしきもやうにぬくさうにぬくさうにぬく
新に語らんコト此道ハ王道相傳ハん故ニ此
東ニナキヤルもやうにぬくさうにぬく

卯虎

卯やう卯のめをぬくさうにぬくさうにぬく
わんやうさうにぬくさうにぬくさうにぬく
ハスナトカニ虎タム景ヤシモニヤトヤ

ワ梅

あすすもろいけがらぬのきいさうさうさう
疎散横斜ハ清浅ノ詩
庭すもろ

あつちの国をわつとてれ原にたて初茅のつとて
西のりや

野康

わらわさるゝ康にわのいふもすゆつとてや
夏野名一照や

深衣月

すきあふれあふりてははてしなくあつちや
夜雪収盡月け遅くもあつち

山お祭

わらわさるゝあふのあつちのあつちのあつち
深衣えりやあつちのあつちのあつち
盛ノ遇けこおアアこトリもくおあ

景の應れあつち

初めは月

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち
西のりや

河氷

初めはあつちのあつちのあつちのあつち
西のりや

連日雪

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち
西のりや

浦千鳥

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

早下之也

夜神系

ちちくすきりもいせぬ棟のふに雲の月で重の
 棟よりモ神ふらうタヒモくべしウケりや
 エテウタフシリカヘストエ

子之

西ふりか
 西ふりか

不逢惡

ちきりあちりしなうらうしきふにふひふん
のうらうしきふに

待求

終りてより結むるに
神の
 カコツハララムんく月ノ神ニ祈んハ海ニガテ
 せんヤ月ニせんシサノミラムキーサラ
 み氏名来入シ二千のえ故ニ馴リ月ナレハ
 カコツバサテトカモナキ月シカコツトえん

遇不逢

わきしやうし件のやうなぬもとの致いあはれに
西のふ

恨恁

ちやうにせりあまやし切ハハのほろとあるわとの
ちのひあまやしちハハは白ヤシ

曉雲

うらたつて月ハ上つたのめいけいさうさうさうさう
いふふふふ

ねえ

つゝ来れりうん三十餘うういふふふふふふふ
いふふふふ

町の霧中燈

地の影もさうううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううう

山家鼠

さういふうううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううう

社頭祝

よにねもさうはからうううううううううううう
ううううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううう

早春篇

日野大納言

数もつねにわづなをよめるあつらふことさへはるかに雪の
前ニ因前ニ

却虎

中も親らひひきつゝにひきつゝにひきつゝにひきつゝにひきつゝに
雪のふり

夕梅

さきもわけてこころにふくむあつたあつたのこころの
こころに似たり来しとるに似たり
月うしよとるよき言ふにさへにさへにさへにさへに
こころにさへにさへにさへにさへにさへにさへに
此處の香木ありさへにさへにさへにさへにさへに

こころに似たり来しとるに似たり

海と雨

さきもわけてこころにふくむあつたあつたのこころの
雪のふり

見花

こころに似たり来しとるに似たり

国時島

さきもわけてこころにふくむあつたあつたのこころの
雪のふり

五月五日

さきもわけてこころにふくむあつたあつたのこころの
雪のふり

こねとふりし奥山

初を時雨

きのふ知けの雨はふりそをわづらふ

無きふか

河氷

水屋河をぬる^{しは}あちやう^はぬる

ぬる河あちやう^はぬる^はぬる

ぬる^はぬる^はぬる^はぬる

本日雪

もくもくぬる^はぬる^はぬる^はぬる

孫康の聲^はぬる^はぬる^はぬる

雪のふり

浦千馬

更なる^はぬる^はぬる^はぬる

りいぬ

夜神ふ

笛のふりぬる^はぬる^はぬる

ふりぬる^はぬる^はぬる

女恋

もくもくの里の^はぬる^はぬる

ふりぬる

不降^はぬる

ふりぬる^はぬる^はぬる

ふりぬる

待志

園字のてしめきかふしにのちるに
無きなり

要ふ

遇不逢承

ちやうど休みの塵がたつねのまゝに
すゑのや

三子

恨

休もさうにねがいのちにかねるさうな
 館のちやうどつにツモミツラヌサミナ思ひ
 思ひつゝハセしツモ思ひつゝラケハ
 却る猶うらうら添へ我思ひより入
 人ノツラサノツラクオおもハ球心カ

懐(あ)のキフにシモミシラヌサニナ愚(おろ)こん

い
て
た
く
ふ
せ
し
し
そ
ふ
す
く
所
つ
ラ
ケ
し
ハ

却、白樺らうらみ添へ、我、此、切、り、入、

人ノワラサノツラクオオエハ城んか

我々之眼に

咬字

とうけのまれのまのちねに
 ねのこけくくわまうまふ
 ちねやうくんのちのち
 ちのち

[illegible]

やうやうと云ふのんこアリ金帳

廿二

秋多

ちちをねきをとくにるまをひつうせにせしめ
 ちちのそとをいひつう儀ありつハタハヤキ
 一つハうりぬえ一はといふやうにせしめ
 つつて名を昔にカへぬ如くつしモ及た
 ずと

志乃のそとを二ツノ儀アリツハタノイヤキ

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

わくわく名の昔に
かへ如き
うわしも
なきた

45

乃て此中より名を採りていふなり。
教あるにあらざるや人なり。この文もその
文の五年のとき常陸院増相國といふを
とてわづらひたり。其の國撰といふと
なり。仰りていふなり。いふなり。
わづらひたり。いふなり。いふなり。
師や活宰相。泰國。新撰。古今集をいひて
とていふなり。いふなり。いふなり。
筆にて曾祖又義親公。いふなり。いふなり。
勅撰の名にいふなり。いふなり。いふなり。
とていふなり。いふなり。いふなり。
なり。いふなり。いふなり。いふなり。

[illegible]

ふかきふかきとて、
とあそびて、いける
ふかきふかきとて、
ふかきふかきとて、

別當の所より
いふ事としてある

とうりしうの愛媛のこまけさ守の焼く
 英園は服源道輔あ千首さくはく人
 すくはは右社よまのゆきうきうき

よりてはてける事の中に伊勢を
たすけたりともあらむわまうそあらむ

千紙よりほかにあらねどもわきよそあらねども
 は小松院虎峯の住名玉は晴乃齋子津波を
 龍虎井入道大物言 兼雄のりよりをうへ
 何れを妙下から奉りて百首を海へ

以鐘の銘表裏圖師
手記されしかるなり
仰

中々名所浦

この所をさういふは五つあるが、

陳夜

は、この浦に於いて、その王侯さう、

文治十九年二月、木上山勅額、

のけり、さういふ、

勅額、さういふ、さういふ、

日、さういふ、さういふ、

宣言、さういふ、さういふ、

奉納、さういふ、

勅額、さういふ、さういふ、

義興、一実の、さういふ、

今、二宮、神宮、さういふ、
さういふ、さういふ、
和布、さういふ、
神宮、さういふ、
さういふ、

か階、さういふ、

吸、さういふ、さういふ、

木上山、神事、さういふ、

い、さういふ、さういふ、

神、さういふ、さういふ、

今、拾、慶和、集、さういふ、

萬、さういふ、さういふ、

さういふ、さういふ、

源、道、順、さういふ、

さういふ、さういふ、

さういふ、さういふ、

陰奧守願氏題をてりて今令傳時

水邊堂

草堂集

[illegible]

白雲の如きものゝこゝろに
 彼宇多院宇桐曲侍より
 禪尼^{高遠}也すなりけり
 ちやう西の海ありて
 藤原基任里より
 くるてはうらわし
 なるなりけり

周制西行又自筆のちが集をててゆけるを
法臨寺僧坊のちがもとやうなて後又紙紙のちが
ちがうてうてうてうてうてうてうてうてうて
のちがうてうて

燈にうつしつゝ室の奥へまゐりては臥せりて
 床の間に掛けたる襦袢中將も此ほど社を修めあは
 して名所の物として現久堂なりと云ふべく
 うう海きくわ時和そのうらちまで現つて
 をくらひけりてふふふ

和分のちやんぽうからばのきこえとてみちを
 店室のちやんぽうを包圍するなり 町奉行
 なとてんちのちやんぽうを包圍するなり 町奉行

[illegible]

日
うさわらふ（送）あはれなりあはれなりあはれなりあはれなり
ぢ

日
 りぬるをふとちたう新らんちう連れちうに
 兵部卿 執権をうけしものなりなう奉使を
 すてかえられし御外通文を平七月辛巳
 にあたり作ししもの新千載集のう御外通
 といふ佛の法よりうより御外懐のう紙

口
 なまの言やといふにこそよきことなるは
 この道なればうつくしき事原家巻に
 朝尚局家よりてはちて新千載集に
 名はれしやうつくしきこと

日
 しめをうけしきして友千尋いづるかのうにほえん
 あく人ぬしを所うそくゆれどもはゆえ
 もよみえをわんたうゆえぬのそく又えを
 やうしてきうふとくゆえ

萬壽寺公義母
 うすくはなれうくと思ふにそ城をなううらめを
 應安三年卯の里のわねすあらて白河國に
 ゆうそそ里つてうらめけう

10
此等の事なきを邦に之を教むるの

はるかなしきもてかゝるまゝにさうせんは
はたけをさへさうせんを

まじりのまじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
まじりなまじりなまじりなまじりなまじりな

宝鑑集

又まじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
まじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
まじりなまじりなまじりなまじりなまじりな

まじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
まじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
まじりなまじりなまじりなまじりなまじりな

10

まじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
まじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
まじりなまじりなまじりなまじりなまじりな

10

まじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
まじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
まじりなまじりなまじりなまじりなまじりな

おれは
このふ
うにや

かき紙こ
例うへて
ういていそん

まにあを
戎のあひ
送ゆきよ

いましめ
市のおくの
おれの

反弓

ちりあまのちをへててえきめいぬくはつたつるやん
 あつぽよふりゆふにさ仲ののをこゆるは葛ほは
 葛のひかり蔽りてみるらん草おもとよりゆき
 るとあやうそて

懷古和子集

ふくむしきまにあらはのひ暮もついにあつて
あつたふりちりうけうこひをそとちりう
こころをりよこめちるまゝこひの痛みのこころを
うかすいぢちものことといふをいかにして

כ

もといふは、
ほゞいふ可
頼山陽の
のせむか
うい

12

東國内初よりうりては平なうてふのあら
いひつゝうりて

あゝいふゝるありぬきしにけり
のまにふり
桐列三浦郊にみりうきうき
ちてついに
つるをいふまてすまの月を
いふ

樹東集

[illegible]

聖護院准后鷹の御子ありてはなまきり
み

[illegible]

とある意のら何のほろを心のわらにえり

15

東載下巻取の古河のき野村田記の端

なることなうにふりてあまてふ葬り
 國々年月の計りこわされつゝ好まぬ
 下りてまゐりてあまてふ葬り
 なることなうにふりてあまてふ葬り
 百々あまてふ葬りてあまてふ葬り
 なることなうにふりてあまてふ葬り
 なることなうにふりてあまてふ葬り

なることなうにふりてあまてふ葬り
 國々年月の計りこわされつゝ好まぬ
 下りてまゐりてあまてふ葬り
 なることなうにふりてあまてふ葬り
 百々あまてふ葬りてあまてふ葬り
 なることなうにふりてあまてふ葬り
 なることなうにふりてあまてふ葬り

優婆塞也二虚也

なることなうにふりてあまてふ葬り
 國々年月の計りこわされつゝ好まぬ
 下りてまゐりてあまてふ葬り
 なることなうにふりてあまてふ葬り
 百々あまてふ葬りてあまてふ葬り
 なることなうにふりてあまてふ葬り
 なることなうにふりてあまてふ葬り

又三四、前相は作し日や何具之院僧正

よりくまのしるし

口

わがしるしにこそぬれりとて御書にあらはせ

唐詩のわがしるしとて御書にあらはせ

詠を御書にあらはせ

口

よのしるしとて御書にあらはせ

草根集

永享元年

よりくまのしるし

中とてしるしとて御書にあらはせ

とてしるしとて御書にあらはせ

とてしるしとて御書にあらはせ

ありといふ

とてしるしとて御書にあらはせ

畠山阿波守 義忠

畠山ちちの頭 持純

畠山仲時大輔 熙貴

畠山右衛門尉 常照

畠山守入道 祐光

畠山利光大輔 持興

武田信賢 坂田信賢

伊勢守貞親見康正元年正月廿七日伊勢守貞親

一色左京大夫教親

興業以盛長如左

杉原伊久入道淨信

漢川有兵備

あるを祝とて有るやうに力あり、

隱於遁世

赤征刑尸大補教員

之石邑郊外南

下部宗頼

之石乃西作
勝曲豆

土岐方集之持益

備前守の侍に
 寛文元年八月
 九月十九日
 入
 九

うきむくちのうきむくち

わくく、いそはなむのふらへる

と後の石段に傍るより入るなり

不
不
不

起而入遠同成

入道信牧のてしる僧

満ちてゐる

石橋大生 佐々木
人あゝいん左様少々の件とある
何の〜ゆえに花なきあゝ

いふにわづらひのまじり

瑞和石京亮元為

斯波佐理之義待種

平頼貞

亨德元年七月廿六日

大腸より右に流る部は

信學

ナミヤの御事よしく候い

治邪大補義健

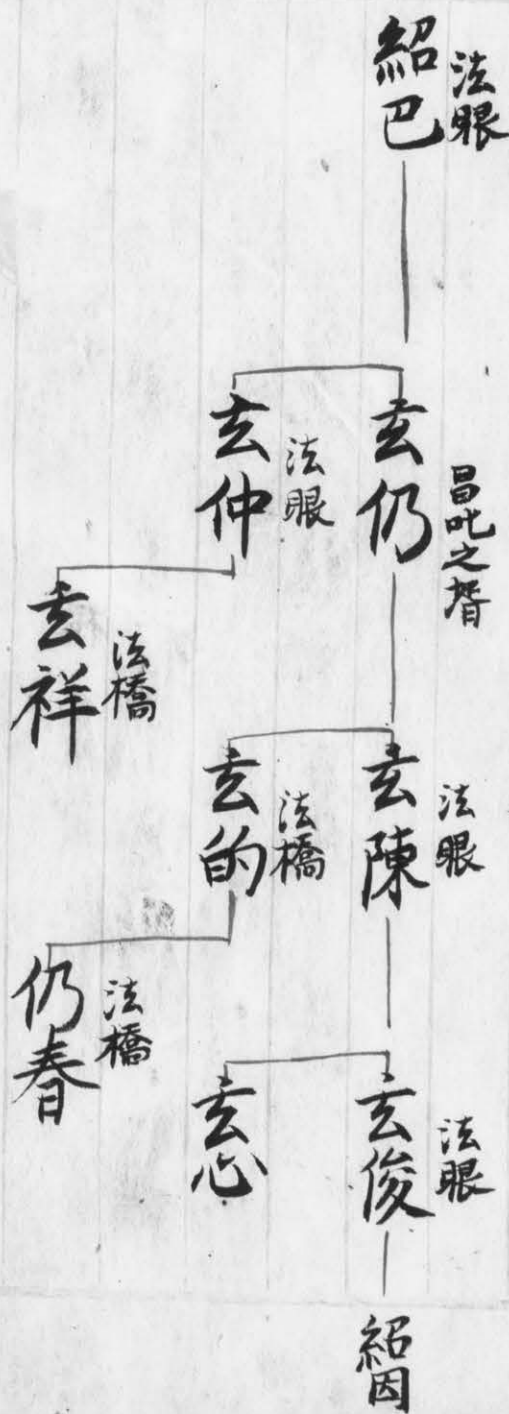
永享九年丙寅の月々日ある敏信親の十二回である
 あち二年卯月十日ある盛隆父の二回のもとも
 又安元年の林常光院光孝父の光阿と云ふ廻
 寛弘二年五月十二日のもとも親元故入道光安（中三年）
 長祿元年十二月二日ある盛隆父のもとも云ふ

宗祇法師傳

後栢原院御宇也文龜二壬戌七月晦日於箱根麓湯本卒去八十二歲葬於伊豆駿河國境桃園會下之定輪寺矣專順又心敬之徒宗祇法師号自然齋又号種王菴紀州人伎樂師之子也少入律院而薙髮遊歷于勝區名山性嗜和歌就常緣而興起連歌之風致也世人以祇為宗匠或又稱之花下蓋為連歌之權輿者乎又會于雪嶺月舟之名緇而著述和漢聯句吁祇生于微賤之家而與貴族公子講交遊之好侍為博陸侯之師模實道之所存也哉

牡丹花傳

肖栢字夢菴号牡丹花後栢原帝之胤也養于久我家而以源為氏後隱處于泉州堺嗜和歌道顯聲譽於華夷曾作牡丹之發句時人以為奇絕因名曰牡丹花且傳受古今集於宗祇翁又參謁一休和尚究心要矣



常光院圓雅百首之因

永享十年の以勅撰事をうけて後和歌和

圖同光孝法下のひととて後集の社まうてく
がよふゆりきういけ方源をうてふれーい
思ひゆく張あまあて

和歌の通波をうてて張あまあてふれーい

新ちと新下 山

友贈太政大

里りけつういこわいふんあれと都へいこいふのなま

九州大學圖書印

